

目を上げれば

原田博行

奨励者紹介〔はらだ・ひろゆき〕

同志社中学校・高等学校キリスト教学嘱託講師

シンガー・フォークソング・ライター&ティーチャー

目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。

わたしの助けはどこから来るのか。

わたしの助けは来る

天地を造られた主のもとから。

(詩編 121編1―2節)

おはようございます。シンガー・フォークソング・ライターとして活動しながら、同志社中学校・高等学校でキリスト教学の嘱託講師を20年以上続けている、原田博行です。今日は、聖書の話、キリスト教の話を交えながら、いくつかの曲をご紹介しますと思います。

視点の変換

もう一度今日の聖句を読んでみましょう。

目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。

わたしの助けはどこから来るのか。

わたしの助けは来る

天地を造られた主のもとから。

今日の聖句が伝えているのは、視点を変換してみるの意味と大切さ、そして、その先には必ず希望が見つかるという約束です。

絶望の中であって、閉じてしまった世界を動かし、そこから抜け出すためには、見ていなかったものに目を注ぐ必要があります。

うつむいてしまっている自分を奮い立たせて顔を上げ、やってくる助けを受け取る準備をしると聖句は言います。そして、必ず、神からの助けは来るのだという強い信仰が感じ取れます。

神様を信じられるとき、その強さは、神様に助けを求めて相談できること、そして、自分ではどうしてもできない過ちや、罪について、謝ることができること、なのではないかなと僕は思います。

人によっては、日常的に、神様との対話が行われます。例えば僕の場合、朝、勝手口の狭い出口を急いで出ようとして、頭なんかを打つと、「え？神様、何か僕はまずいことをしましたか？」などと右上の方向に

問いかけてしまうことがあります。だいたい、右上やや後ろの方向へ、なんとなく僕なんかは問いかけてしまう訳です。返事がある訳ではありません。けれども、「あ、ちょっと傲慢になっていたかな」とか「わがままを言っていたな」とか「感謝が足りない日々だな」とか、気が付くことはたくさんあります。「すみません、気を付けます。ありがとうございます」という気持ちになったりします。

絶望を超えた希望

自分は進むべきか、いま本当にやるべきことはなにか。随分考えてきたことなのに、うまくいかない。自分勝手になってしまい、周囲に迷惑をまき散らしていることに気が付きます。

キリスト教は罪の本質を「エゴイズム」だと語ります。神様の示す道ではなく、自分が行きたい道を勝手に進んでいるのではないか。食べてはいけないといわれていた善悪を知る木の実を自分の判断で神様との約束を破って食べてしまったアダムとエバのように、神様の声を無視して自分の判断でエゴイスティックに動いてしまっていないでしょうか。

時々、立ち止まって考えてみます。

人を押しのけて進もうとしている自分や、愛が足りない判断をしている自分が見えてきます。「神様に喜ばれるのではないか」と思って始めたことであっても、いつの間にか、自分のためにだけ動いてしまっているのではないか。

クリスチャンだって、エゴイスティックな人間です。そして、そのエゴは、時には大切なモチベーションになり、物事を動かす原動力になります。何回も間違い、何回も謝りながら、そして、その都度に耳を傾けながら、自分の人生を生きていくしかないのだとも思います。

その苦しみの時に、悔い改めることが赦されていること。自分の罪の身代わりとなって十字架についてくださったイエス様が背中を押してくれること、それこそが、キリスト教の語る、絶望を超えた希望だと思えます。先日、新しく書いた「光のこる空」という曲を一部ご紹介したいと思います。

「光のこる空」(作詞作曲 原田博行)

神様に謝った 誰かを傷つけたり 迷惑かけてることは もう知ってる
それでも 今日を また 信じる道の上に
明日を描くかな 誰かが運んでくれる 物語などないことは もう知ってる
生き生きと今日を ただ 信じる道の上に刻もう

今日の詩編は語ります。「わたしの助けは来る」。

信仰者にしてもそうでない人にも、本当のことだろうかと思う人は多いかもしれません。どんなに望んでも助けが来ない経験をした人も沢山いるのではないのでしょうか。

しかし、僕はやっぱり助けは来ると思うのです。冒頭、僕は、今日の聖句が伝えているのは、視点の変換とその先に必ず見つかる希望への約束ですと言いました。魔法のようにアクシデントが解決したりするわけではないのですが、何も状況は変わらないのに、自分の物事への見方が変わる事で、全てが解決した

り、解決の糸口をつかむ経験をする事も事実だと思うのです。

それは、不十分で不完全な人間が精一杯生きていく中で確信していく真実なのだと思います。

神様に相談する、神様に助けを求める。でも、その答えは、生活の中に多くの場合は周囲の人を通してやってくると思います。

天国とは

天国はどのような場所だろう。そんなことを語り合ったことがあります。「川が流れていて、お花畑がひろがり、ほとりに美女が座ってハーブを演奏している」「欲しいものがなんでもあって、不安のない世界」そんなイメージが語られます。

しかし、そんな世界、退屈ではないだろうかと思ふわけでは。

「Heaven」という曲を書きました。

「Heaven」（作詞 原田 博行／作曲 住吉 中）

天国はこの世にあるって教えてくれた君
目に見えないけれど感じるのが本当の証
天使は気まぐれでも応援してくれる
前を向けるよ ほらキスしてハグして

Everyday Everynight 一つの愛求めてる
Everyday Everynight 小さな命が生まれてる

目を上げよう

「天国は生きている間にこの世界の中にも感じる事ができる」「神様からの愛は人を介してやってくる」そんなことを思います。信仰において感じる時に、それは、論理的な証明はできなくても、確信となっていく出来事だとも思うのです。

「そんなものは思い込みだ。神様は助けてくれない。自分は見捨てられている」。そんな気持ちに飲み込まれて、自分一人で何かを解決しようしたり、意固地になって孤独を感じたり。

わたしたちは、知らない間にうつむいてしまっていないでしょうか。何かにおびえて目を閉じたり、疑いの心で本当の事を見失ったりしてはいないでしょうか。

目を上げよう。

それは、小さな変化かもしれないけれど、きっと、新しい発見があるように思います。

「目を上げれば」という曲を書きましたので、最後にその曲の終わりの部分をご紹介します。

「目を上げれば」（作詞作曲 原田 博行）

難しい ことじゃない 沈む思い断ち切って 目を上げれば
今 君がそばにいて 今 君と目が合って
笑い合える幸せに気付いて 確かに全てはわかる
誰かがそばにいて 誰かと目が合って
愛し合える幸せに気付けば 確かに全てはわかる

2016年10月12日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録